S・A・K・U・R・A　～桜～

羽沢　将吾

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｓ・Ａ・Ｋ・Ｕ・Ｒ・Ａ　～桜～

【Ｎコード】
Ｎ９９５４Ｄ

【作者名】
羽沢　将吾

【あらすじ】
いつもイイヒト、で終わってしまうモテない青年、神坂甲。愛車フィアット・パンダで失恋後の傷心旅行に出掛けた甲は、初春の麗らかな日差しの中、美少年・桜と出逢う……羽沢将吾、春エロス参加作品第二弾です。

上（前書き）

こんにちは、羽沢将吾です。
いつも自分の作品をご愛読下さいましてありがとうございます。
ひょんな切っ掛けで出逢った一組のカップルにインスパイアされて
こんなん出来ました（笑）
少々はちゃけ気味ですが、楽しんで頂ければ幸いです。
一応、上・中・下の三部作の予定です。
本編はＢＬ要素を含みます。苦手な方はご注意下さい。

上

しとしと、と言った風情で雨が降っている。
「一雨ごとに暖かくなる、か……」
俺は、さっきまで一緒に飲んで居た部長の言葉を繰り返してみた。
それにしても、だ……
なんで俺には彼女が出来ねぇんだろ？
自嘲的に微笑みながら駅を目指して歩き出す。
今日は、今までしょっちゅう一緒にドライブしたり飲みに行く
会社の後輩の朋美ちゃんに告白してフラれた俺の慰め会だった。
俺をフッた当の本人である朋美ちゃんが出席したのにはひっくり返ったが……

俺は身長も体重も人並み。
顔はまあ、良い方じゃないだろうがとんでもないってワケじゃないし、
高校時代にはそれなりに憧れている下級生も居たらしいと聞く。
女友達は多く、遊びに行く事も多いし、先日のバレンタインで
頂いた義理チョコは二桁を数えたんだが……
なぜか告白する度にフラれるんだよな。

とすれば、だ。

やっぱ、悪いのは性格なのか……？
自分じゃ解らないが、この性格が悪いのか？
春の気配は段々と高まってきてはいるが、俺自身の春はまだまだ遠そうだ。

「おー、良い天気！」
窓から差し込む日の光に起こされカーテンをシャっと開けると、
昨晩の雨はどこへやら、の青空が目に眩しい。
さて、これだけ良い天気だと、せっかくの週末を寝て過ごすには勿体無いな。
山の方には雪が有るみたいだからバイクは無理だが、車だったら楽しめそうだ。
「よし、久々に一人ドライブに行くかな！」
時刻を見れば午前七時ジャスト、俺はシャワーを浴び、
三泊分の荷物をボストンバッグに詰め込むと愛車の鍵を握って駐車場へ向かう。
「よしよし、良いコで待っててくれたか」
俺は愛車・フィアットパンダ４×４の少しヤレたイタリアンレッドのボディを
ポンポンと叩き、ドアを開けて乗り込んだ。
数回アクセルを踏み込み、ガソリンをキャブからエンジンに送り込んでからセルを廻す。
クゥクゥクゥ…バロン！！
１０００ｃｃＦ・Ｉ・Ｒ・Ｅエンジンが軽やかな音と共に目を覚まし、不安定なアイドリングを始める。
こいつとの付き合いももう五年になり、既にポンコツに片足を踏み入れてはいるが
すっかり体に馴染んでしまって手放せなくなっちまった。
俺はアクセルを調整しながら暖気し、水温計が少し動き出すのを確認してパンダをスタートさせた。
「さて、西に行こうか東にしよか？」
高揚してくる気分を感じながらアクセルを開けていくと、

昨晩の陰鬱とした気分が少しずつ晴れてくるのを感じる。
ま、俺は一人の方が性に合ってるのかもな。
そんな事を思い苦笑しつつ、信号待ちで地図を開いて行き先を考える。
今週は月曜まで有給休暇を取っているから、少し足を伸ばしてみようか。
そう考えた俺はウインカーを出し、東名高速道路方面へとハンドルを切った。
インターの手前のコンビニで朝飯を買うついでにどこへ向かうか考えながら
旅行情報誌を立ち読みしていると、美しい雪景色に彩られた山の写真が目に留まる。
「雪山、か。そうだな……」
コンビニの駐車場でおにぎりを頬張りながら地図を確認し、
「よーし、信州の温泉&スキー場巡りでもしようか！」
もちろん、今回スキーはしないがスキー場の有る山なら冬季閉鎖もされていないし
雪もたっぷりあって、パンダの四駆も生かして楽しく走れそうだ。
リアシートには車中泊用に毛布と布団、寝袋にキャンプ用の炊事道具も放り込んで有る。
「よっしゃ、こりゃ楽しくなりそうだ！」
俺は東名高速には乗らず、更に北にある中央道を目指してパンダを発進させた。

二時間後、中央道に乗り、西へと向かってクルージングする。
途中、意外と道が混んでしまい時間が掛かっちまったな。
これから諏訪まで高速を走り、諏訪で温泉入った後に霧が峰へ向かうか……
ひたすら高速を１００ｋｍ／ｈで走り、諏訪インターチェンジで高速を出てから諏訪湖半へと向かう。湖畔に有る片倉館、というかつ

て紡績工場の女工さんの
福利施設として建てられた百人は優に入れそうな浴槽を持つ温泉施設の
駐車場へパンダを滑り込ませ様とした時。

「きゃ！」
「うおっ！」
少し気が逸っていたからだろうか、歩道を走ってきた少年に気付くのが遅れ、
ブレーキを掛けたが間に合わずバンパーを軽く少年に当ててしまった。
「やべ！やっちまった！？」
俺は急いでパンダを停め、少年に駆け寄る。
「ごめん！大丈夫かい！？」
しゃがみ込んだ少年を抱き起こした。
「あ…」
少年が小さく呻き、つん、と饐えた臭いが鼻を突く。
「っと、こりゃ……」
俺は臭いに顔をしかめながら、マジマジと少年を見詰めた。
抱き起こした少年は酷く垢じみた顔をしており、更に服はボロボロだ。
だが、女の子と間違えそうな程の美少年で、その瞳には深い知性の輝きが見えた。
「どこか痛い所は無いか？近所の子かい？」
臭いに閉口しながらも少年を立たせ、ざっと全体を確認する。
うん、目立った外傷は無いし、頭は打ってないから大丈夫そうだ。
だが、一応警察と病院には連れてかないとな。
まずは、少年の家族に連絡しないと……
「とりあえず、病院に行こう。君はこの近くの子かい？お家はどこ？」

もう一度少年に尋ねると、首をふるふると振りながら
「え……か、体は大丈夫。家は、無いの……」
と震える声で答える。
「家が無い？お父さんやお母さんは？」
俺の言葉にびくっと体を震わせ、ぽろぽろと涙を零し始める。
「どこか痛いのかい？」
「お父さんもお母さんも居ないよ……」
「……はぁ？」
少年から帰ってきた答えに戸惑う俺。
「じゃあ、キミはどこから来たんだ？」
と再び俺が聞いた途端、少年の腹がぐうう、と鳴った。
「……お腹、減ってるのか？」
俺の問いにこくんと頷く少年。
これは、何かワケ有りだな……
「とにかく病院と警察に行こう。ご飯はその後食べさせて上げるから」
立ち上がりながら少年に向かって優しく言った俺の声を聞いて
少年がビクッと振るえ、ぶんぶかと首を振りながら半泣きになる。

こりゃ、家出か……？

俺は厄介事を抱え込んじまった事を実感しながら、大きく溜息をついた。

一時間後、近所のファミレスでまさに欠食児童そのものの勢いで
カレーとハンバーグ定食をガツガツと掻き込んだ少年を連れ、
コンビニで子供用の下着を買い込む。
「サイズはMでいいね」
俺が少年に聞くと、コクンと頷きながら嬉しそうに俺を見詰める。
その可愛らしい笑顔に思わずドキっと胸が鳴り、

慌てて首を振りつつ自分を叱咤する。
おいおい、なにトキメいてんだよ俺は！
確かに、見れば見るほど驚くような美少年だが……
つぶらな大きな黒瞳はくるくると良く動き、青ざめていた顔は満腹してから
赤みが差してきて健康的な雰囲気を強く感じさせる。
つん、と尖った鼻に小さな薄い唇、優雅なカーブを描く顎のライン……
だ、ダメだ。見れば見るほど可愛らしくてドキドキする。
ヤバイ、ヤバイぞ俺。そんな趣味は無い筈だ！
とにかく俺も風呂に入りたいんだから、もう一度片倉館に行こう。
この子をどうするかは、風呂で相談しながら考えよう……
そう言えば、まだ名前も聞いてなかったな。
「なあ、キミはなんて言う名前なんだ？
俺は甲（こう）。神坂甲（みさかこう）だ」
「甲……」
おいおい、呼び捨てかよ。まあ、良いけどね……
「ボクは、桜（さくら）って言うの」
サクラ？佐倉？ああ、苗字か。
「サクラ？それは苗字だね。名前は？」
「え…？あのね、桜が名前」
ありゃ、名前か。花の桜なのか。
「じゃあ、苗字は？」
俺が再び尋ねると、桜はピクッと体を震わせて泣きそうな表情になる。
「あー、ま、いいや。気が向いたら聞かせてくれ」
俺は桜の頭を優しく撫ぜてから、下着と靴下を持ってレジへ向かっ

た。

大正ロマンを強く感じさせる片倉館の男湯の広い脱衣所。
まだ時間的に早い所為か、また観光シーズンから
完全に外れている所為か、俺達以外は誰も居ない。
その脱衣所で、俺は服を脱いだ桜の垢じみた肢体に目を奪われてしまった。
細くしなやかな肢体のアチコチに赤く浮かび上がるみみず腫れが有り、
所々に軽い火傷の痕、少し膨らんだ女の子の様な胸には、引っ掻かれた様な爪痕も見られる。
それにしても、これくらいの歳の男の子に時折見られる女性ホルモンの分泌過多に拠る
乳房の膨らみは、少女の様な顔と合わせ、股間の男の子の印を確認しなければ
そのまま女の子と思い込んでもおかしくはない、不可思議な、まるで妖精の如き雰囲気を漂わせていた。
俺も、桜がこんなに汚れて居なければ普通に女の子だと思っただろう。

思わず見惚れていた俺の視線に気付き、俺を見詰め返す桜のつぶらな瞳。
「甲、どうしたの……？」
不思議そうな顔で尋ねる桜の肉体は、まるで少女の様な儚さと少年の瑞々しさを
併せ持っていて、何とも言えない仄かな色香を俺の瞳に焼き付けた。
少し膨らんだ柔らかそうな胸の先には名前の通りの桜色が色づき、
アバラが透けて見える程薄い脂肪のお腹に下には……！

ハッと気付くと、桜が俺の顔を心配そうに覗き込んでいる。
「い、いや！なんでもない！」
なんでもないことは無ぇよ！と思いつつもワザとらしい笑顔で誤魔化す。
「お風呂、入ろ」
にっこりと微笑む愛らしい顔と無邪気な態度に俺の胸が様々な意味でドキドキと脈打つ。

いかんいかん！俺は頭をぶんぶんと振り邪念を払って、
「ああ、そうだね」
と答えて、手を絡めてくる桜に引っ張られて千人風呂、と呼ばれる広い浴場へ向かった。

「わあ……凄いね」
桜がだだっ広い浴槽を見て歓声を上げる。
片倉館の浴槽はかなり深く水深一メートル以上有り、底には玉砂利が敷かれている。
俺は、掛け湯もせずに浴槽に飛び込もうとした桜を抑え、
「まずは体を洗ってからだ！」
と言いながら浴槽の右手の壁の向こうに有る洗い場に連行した。
「ほら、目を瞑って」
まずはボサボサになっている髪の毛からだ。
俺はシャワーで充分湿らせた後、シャンプーをたっぷりかけてワシャワシャと髪を掻き回す。
「やん！自分で洗えるもん」
そう言いながら俺の前で身を捩る桜のしなやかな背中が俺に押し付けられ、思わず心臓の鼓動が早くなる。
「じゃあ、頭は自分で洗え。俺は体を洗ってやる」
体だって自分で洗わせれば良いものを、なぜ俺はそんな事を言ってしまうのだろうか。

「うん」
素直に頷き、一生懸命頭を洗い出した桜の肩口にボディソープを掛け、
俺はタオルを使わず手で直接、瑞々しい桜の肉体を洗い始めた。
「あん、くすぐったいよぅ」
俺の手が桜の脇の下に触れると、妙に色っぽい声を上げながら桜が悶える。
「我慢しなさい！綺麗にしなきゃダメだからな」
厳しげな声を出しながら、俺は手に感じる滑らかな桜の肌の感触に夢中になっていた。
「あっ、ああん！こそばぁい……」
桜の声に少しづつ、くすぐったさだけでは無い何かが篭っていくのをはっきり感じる。
俺の両手は、いつの間にか、仄かに膨らんだ胸の辺りを上下に往復していた。
手の平に少し硬く勃起してきている突起物の感触を感じる度、
「はぅん……」
と熱っぽい溜息を桜が吐き出す。
俺は桜の背中に自分の胸と腹をピタリと着け、桜の耳元に唇を近付け呼吸を荒げてしまっていた。
「甲、ボク、なんだかヘンなのぉ……」
肩越しに俺を振り返り呟く桜。
「何が、ヘンなんだ？」
必死で呼吸を鎮めながら、平静を装いつつ聞き返す俺。
「あのね、あのね……おっきく、なっちゃったの」
「え……」
桜の肩越しに下方向を覗くと、そこには可愛らしいものがちょこん、と上を向いていた。
「こら、桜……ダメじゃないか」
全く説得力に掛ける声を上げるが、迫力も何も有ったもんじゃない。

「でも、でもぅ……甲だって、おっきくなってるよ……？」
少し瞳を潤ませながら桜が俺を見詰める。
「！俺はもともとコレくらいなんだよ」
とんでもない嘘をつく俺。
「うそ……さっきよりも、大きくんむ！……」
桜の非難がましい眼つきと口調から逃れる為、俺は思わず桜の唇に自分のそれを重ねてしまった。

中

「ちょっと、寒くなっちゃった」
すっと俺の唇から離れた桜が、恥かしそうに微笑みながら呟く。
「あ、ああ。石鹸流してゆっくり浸かろう」
俺は慌ててシャワーで石鹸をしっかりと流し、桜の手を引いて浴槽に浸かった。

「すごぉい！立ったまま首までお湯に浸かっちゃうよ！」
背の低い桜は首までお湯に浸かって嬉しそうに泳ぎ回る。
俺はそれを見ながら心の底から溢れて来る愛おしさに、とてつもなく戸惑っていた。
「ねえ、甲。僕ね、行く所も帰る所も無いの……
もし、もし甲が僕の事嫌いじゃ無かったら、一生懸命お手伝いするから連れて行って……」
一頻り湯船の中をはしゃぎながら泳ぎまわっていた桜が俺の所へと戻り、
俺の首に手を廻して抱き付きながら躊躇しつつ呟く。
「え……？ええ？」
自分の中で不可思議な葛藤と戦いながら、ぼーっと桜に見惚れていた俺は
一瞬、桜の言葉の意味が良く解らずに間抜けな声で生返事をしてしまい、
じいっとつぶらな瞳で俺を見上げる桜の顔をぼうっとした頭で見詰めた。
「なんだって！？どういう事だ！？」
桜の言葉の意味を頭の中で反芻しているうちに、
その中に含まれた深い、そして哀しい意味に気付いた俺は突然大声を上げてしまい、

「きゃ！びっくりした！」
と桜を驚かせてしまった。

悲しそうに俺から瞳を逸らす桜に向かって再び誰何しようとした時、
「おー！ガラガラだ」「こりゃ良いのう」
と大声を上げながら団体さんらしきおっさん達がどやどやと入ってきたので
「桜、その話はまた後でゆっくりな」
と平静を装いながら優しく言い、コクンと頷く桜を確認してから俺は浅くなっている足場に腰掛けて首まで湯に浸かり、ふうと溜息をつく。
すると、桜が俺の膝の上に対面で座り、自分の可愛らしいモノを俺のモノに重ねる様にして抱きついて来た。
「桜、もうちょっと離れなさい」
自分の意思に反し、ドンドンと大きさと硬さを増してしまうモノを持て余し慌ててしまい、
桜にそれを感づかれる事を畏れて桜の瑞々しい肉体を自分の体から離す様にして注意する。
「甲は、僕の事がイヤなの……？」
俺を見上げて大きな瞳に涙を盛り上げる可憐な顔に慌て、
「そんな事は絶対にない！っていうか、俺はお前が好きだ」
と即答してしまい、自分で自分にびっくりしてしまった。
「え！……えへ、僕もね、甲の事、最初からカッコ良いなって思ったんだ……」
全身を桜色に染めた桜が湯船から少し立ち上がり、俺の頭を抱えるようにして抱きついて来た。
少し膨らんだ少女の様な胸が俺の目の前に晒され、心臓が破裂する程の鼓動を上げる。

こ、これは溜まらん！！

「さ、そろそろ出ようぜ！」
周りの団体さんが少し不振気な視線を俺達に向けているのにも気付き、
俺は桜を抱き上げて小走りに浴場を後にした。

片倉館を出て、パンダに乗り込んでエンジンを掛け、
ガタピシと音を立てながら諏訪湖岸道路を走り出す。
隣にはホカホカと湯気を上げ、嬉しそうにニコニコした桜がフンフンと鼻歌を奏でていた。
桜の着ていた服は汚れ過ぎていて話にならなかったのでコンビニ袋に入れてしまい、
俺の寝巻き代わりの大柄な袖突きTシャツをさっき買ったTシャツの上に重ねて着させ、
下半身には同じく寝巻き代わりの膝までのショートスラックスを履かせてある。
「なあ、桜。さっきの話だけどな」
「はい？なあに？」
大きな瞳を俺に向けて嬉しそうに笑う桜。
さっきの事を聞きたいのだが、無邪気な笑顔を見せられると聞くのを少し躊躇してしまう。
だけど、このままにしておく訳には行かないよなあ、やっぱ……。
俺は、一つ深呼吸をしてから再び口を開いた。

「ああ、さっきお前が言っていた、行く所も帰る所も無いってのはどういう事なんだ？」
「え……」
俺の質問に驚きの表情を見せ、直ぐに悲しみの表情へと変化させてしょんぼりと黙り込んでしまう桜が気になり運転しながら助手席を

見ると
桜は下を向いたまま、つやつやした膝の上にポタポタと涙を零していた。

俺は霧が峰方面へとハンドルを切り運転に集中し、桜が話し出すのをじっと待つ。
急激に高度を上げていくつづら折れの道を抜け、そろそろ霧が峰のゲレンデが見えてくる頃、
桜はポツリ、ポツリと自分の身の上を話し出した。
「あのね、甲。僕はね……」
そして、俺は桜の過酷な身の上を知らされた。

桜は現在十二歳、来年度は本来なら中学生となる歳だという。
桜はとある地方都市でホステスをしている母の元で父親不明の私生児として生まれ、
小学三年生までその街で母親と二人で暮らしていた。
母親は男や金にルーズな女だったが桜の事は溺愛し、
色々と問題も合ったが二人は貧しくも幸せな生活を送っていたと言う。
しかし、桜が小学四年生に上がる直前の春、ちょうど今から二年前に母親はガンで亡くなってしまい、桜は一人残されてしまった。
親戚付き合いなど無かったので、桜は孤児として施設に送られそうになったが、
地方役場の職員としては信じられないほど親切な女性の献身的な努力によって
桜の母方の祖父母が割り出され、連絡を受けた祖父母の長男夫婦、
すなわち桜の母親の兄夫婦が桜を迎えにやって来たのだ。
桜にとっては伯父となるその男は、桜の顔を見るなり
「お前などは放って置きたかったが、お前の祖父母のたっての頼みで迎えに来てやった。

これからは家で面倒を見てやるが、迷惑を掛けたら許さないからな」
と言い放ったという。
連れて行かれた家はとても大きく、祖父母は桜を優しく暖かく迎えてくれたが
同居している伯父夫婦と二人の息子は桜に対して厳しく、冷たく当たった。
ただ、桜より四つ年上となる伯父夫婦の娘は優しく接してくれ、
桜も「お姉ちゃん」と呼んで慕っていたのだが……

桜が引き取られてから一年程経った頃、
桜を可愛がり庇ってくれていた祖父母が相次いで病死してしまった。
そして、その遺産相続の為にやって来た弁護士が読み上げた内容は
「孫である桜に遺産総額の三分の一を譲る」
というモノだった。
伯父夫婦は怒り狂い、何も解らず戸惑う桜を攻め立てた。
桜は脅され、そして折檻されて無理矢理相続放棄をさせられそうになったが
代理人として指名された祖父母と懇意の弁護士はそれを許さず、
しかし桜の事を思って味方をしてくれる訳ではなく桜にとって地獄の様な日々が続いた。

そんな或る夜、桜の寝床にお姉ちゃんが忍び入り、
桜を抱き締めて慰めてくれ、一緒に寝てくれた。
寂しさ孤独に打ち震えていた桜は嬉しくて、お姉ちゃんに抱き付いてぐっすり眠ったのだが……

翌朝、鬼の様な、しかしどこかしら嬉しそうに勝ち誇った伯父夫婦に叩き起こされて
「貴様は娘をキズモノにした！子供だと思っていたがとんでもない

ヤツだ！」
と意味が解らない罵詈雑言を投げつけられ、折檻されて半殺しにされてしまう。
それからは毎日が暴力の日々で、そして伯父と高校生の長男から性的虐待まで受けるようになり、桜は身も心もボロボロになり、とうとう我慢出来なくなって伯父の家を飛び出して来たのだと言う……

「なんだそりゃ……酷すぎるぜ」
霧が峰のゲレンデ前の駐車場にパンダを停めて話を聞いていた俺は、真っ赤になって泣きながら告白を終えた桜を呆然と見詰め、あまりの事に言葉を失っていた。
「ヒック、だから、ヒック、もう帰れないの。
帰りたくないの……」
愛らしい顔をクシャ、と歪めて
「ふえ～ん……」
と泣き出した桜を俺は無意識にぎゅうっと抱き締めてしまう。
「甲……あ～ん！ふえ～ん！！」
桜は俺の胸に顔を押し付け、熱い涙で俺のシャツを濡らしながら号泣しだした。

了

俺の胸に噛り付いて泣き続ける桜。
俺は心の底から沸き上がって来る愛おしさに身を焼かれる程の熱さを感じていた。
「桜……」
俺は泣きじゃくる桜の顔を右手の人指し指と親指で優しく摘み、そっと上を向かせる。
「えっ、えっ……甲……？」
少し戸惑った様な桜が、泣きじゃくるのを止めて俺の瞳を涙で濡れた瞳で見詰め返す。
そして、ふっと瞳を閉じて可愛らしいピンク色の唇をそっと突き出した。

「桜……」

俺は一瞬迷ったが、ゾクゾクと背筋を這い上がってくる欲望と愛おしさのミックスジュースの甘い誘惑に抗え切れず、桜の唇に自分のそれを重ねた。
「ん……」
桜が可愛らしく喘ぎながら、ピクっと華奢な肉体（からだ）を震わせる。
「桜……さくら！！」
俺は唇を重ねたまま、桜の名を連呼しながら桜の甘い口の中に自分の舌を差し込んだ。
「ひゃう！ひょう……だいひゅき」
戸惑いがちに俺を受け入れ、一生懸命、といった感じで絡めて来る桜。
俺と桜は、しばらくそのまま一つに重なっていた。

五時間後、俺達は草津の道の駅で休憩をしながら
観光案内所で開いているホテルを探してもらっていた。
「凄いね、甲。こんなに雪が一杯あるよ！」
すっかり明るさを取り戻した桜は、雪を手に持ってはしゃいでいる。
街中の温泉旅館の予約を取って貰い、はしゃぐ桜を連れて旅館へと向かう。
桜はじっと俺の横顔を熱の篭った瞳で見詰め、頬を桜色に染めて微笑んでいる。
俺は愛らしい桜の笑顔を見詰め返しながら、一つの決意を固めていた。
旅館の宿帳には「兄弟」と記入して部屋へと案内される。
その部屋は、専用の温泉が着いている豪華な部屋だった。
「凄～い！こんなお部屋初めて見たよ」
桜が露天風呂を見詰め、大きな瞳を丸くしながら叫ぶ。
「ねえ、甲……こんなお部屋、高いんでしょ？」
後ろから桜の肩を抱きしめた俺を見上げ、おずおずと聞いてくるのに
「ああ、でも気にしなくて良いんだ。
今の俺自身は貧乏サラリーマンだが、もう俺は決めたから」
「……？どういう事なの？」
かなり戸惑った感じに桜が聞き返してくる。
そりゃ、意味不明だろうな、今の言葉じゃ。
「良いんだ、桜。お前は何も心配しなくてもね。
お前は、俺の事が好きかい？」
俺を見上げる桜を優しく見詰めながら聞く。
「うん！大好き！僕が女の子だったら、甲のお嫁さんになりたいくらい」
俺を見上げた桜が満面の笑みで応えてくれる。
「俺もお前が大好きだよ。
桜、俺を信じて、俺に全てを任せてくれるかい？」

もう一度、俺は桜の瞳をじっと見詰めながら聞く。
「うん。僕ね、甲の事全部信じるもん」
切ない程の笑顔で応えてくれる桜。
「あん……」
俺は微笑みながら、桜色の唇に自分のそれを重ねた。
「お風呂、入ろ」
しばらくお互いの熱を確かめ有った後、そっと唇を離すと、
桜がとろんとした艶っぽい瞳で俺におねだりする。
俺と桜の間には透明な細い糸が引かれていた。
「ああ、そうだね」
俺は桜の服を脱がせながら、桜の体についている瑕(キズ)を
一つ一つ指で優しくなぞり、そして舌で舐め上げる。
「ひぃあっ！あふぅ……」
瑕に指で、そして舌で触れる度に桜の細い肉体はビクン！と跳ねる。
桜を生まれたままの姿にした時、桜の太腿の付け根には
可愛らしくも雄々しさを感じさせるものがヒクヒクと痙攣していた。
「甲、体が熱いよぅ……」
俺は軽い桜の体を抱き上げ、そのまま湯船に一緒に浸かる。
湯は身を焼くように熱いが、俺の体そのものも熱く滾っていたので
それほど気にならなかった。
「桜、お前を全部貰っても良いかい？」
俺は桜の可愛らしい耳たぶを甘く噛み締めながらそっと囁いた。
「ひゃうっ！……うん、甲に、僕をあげる。
　僕、甲のモノになりたいよ」
対面に抱きしめた桜のものと俺のものとが熱い湯の中で絡み合う。
俺は桜を少し持ち上げ、女の子の様な可愛らしい胸の先端に息づく
朱色の突起物の廻りを丁寧に舐め上げ、桜の息遣いが荒くなるのを
確認してから
突然突起物を口に含み、前歯で磨り潰す様にカシカシと甘噛みした。
「あは！あ……ん……甲……大好き」

俺の頭を抱えるようにしてひくひくと痙攣する桜。
俺はしばらく桜の肉体の隅々までを、手で、指で、口で、そして舌で味わい、
桜を何度か絶頂に導いてから華奢な肉体を抱き上げて
タオルで拭きもせずにベッドへと寝かせた。
荒い息をつきながら、小さく膨らんだ胸を上下させている桜を見詰めながら
洗面所に置いてある使い捨ての小さな石鹸をパッケージから取り出し、
温泉の湯ではなく洗面所の蛇口から出る通常のお湯でよく濡らして
洗面器に溶かす。
「あふ、はあぅ……」
ようやく息が整ってきた桜にキスをしてから、
「桜、力を抜いて」
と言いながら、桜の菊の周りを石鹸水で解す様にマッサージする。
「！」
ピクっと体を震わせ、脅えたような瞳で俺を見詰める桜に
「怖いかい？嫌なら止めるよ」
と優しく言いながら再びキスをする。
「ううん、大丈夫。甲がしたいように、して。
僕を、甲のモノにして……」
「桜、愛しているよ」
「僕も……ずっと、甲と一緒に居たいよ……」

その夜、俺は桜の花弁を貪り、俺と桜は一つになった。

プルルルル……ガチャ
「はい、神坂でございます」
「あ、カナさんか。俺だよ」

「まあ、お坊ちゃま！お元気でしたか？お家にお電話してくるなんて、何か有ったのですか？」
カナさんは俺の実家に勤めるメイドさんだ。
俺が実家を出るまでは、俺専属だったのだが、今は実家のメイドを束ねるチーフをしている。
「ああ、親父に、家に戻って跡を継いでも良い、って伝えてくれないか。
　但し、条件が有る」
「まあ！それはお館様が狂喜乱舞致しますわ！
　で、条件ってなんですの？可愛らしいお嫁さんでも連れてお帰りになるとか？」
カナさんは破天荒な型破りメイドさんだが、比類の無い有能さと性格の良さで
親父とお袋、そして俺が最も信頼している女性だ。
だからこそ、実家を離れてもカナさんにだけは時々近況報告をしている。
「うん、まあそんな所かな。
　で、その為に幾つかお願いしたいんだ……」
そして俺はカナさんに、桜の事を全て話した。
「あらあら、さすがお坊ちゃま。する事為す事常識破りでいらっしゃいます事」
カナさんにそれを言われちゃオシマイだなぁ……
俺は苦笑しながら、続けて桜の伯父夫婦との間の決着を着けてくれる様に
カナさんにお願いし、二つ返事で諒承を得た。
ま、カナさんに任せておけば万が一にも間違いは無い。
桜の事も、俺と桜のこれからの事も、な。

そして四月。

俺は会社を辞め、もう離れる事など考えられない程大切な存在となった桜を連れて
数年振りに実家の門を愛車（パンダ）で潜ると、そこは壱面の桜色の世界となっていた。
「わあ！すごいね！こんなに広くて、こんなに桜の木が一杯あるお家なんて初めて！」
実家の庭には数十本の桜の木が立っており、この時期、庭は桜の花弁が絨毯の様に敷き詰められている。
一際大きな、樹齢百年を越える桜の木の下でパンダを停め、俺達は桜色の絨毯を踏みしめた。
はしゃぎながら俺にじゃれつく桜を抱き上げ、
「これから、ここがお前の家になるんだよ、桜」
と言う俺の唇に桜がそっと自分の唇を重ねる。
「甲、大好き……ずっと、一緒にいてね」
「ああ、約束だ」
俺と桜は、満開の桜の木の下で、もう一度唇を重ねた。

そう、俺と桜の、新しい人生が、これから始まる。

桜舞い散る、この場所から、ずっと……

Ｆｉｎ.

了（後書き）

Ｅｎｄｉｎｇ ｉｍａｇｅ ｓｏｎｇ：春よ、来い
Ａｒｔｉｓｔ：Ｙｕｍｉ Ｍａｔｓｕｔｏｙａ

Ｓｐｅｃｉａｌ ｔｈａｎｋｓ ｔｏ Ｍｓ．Ｆｕｊｉｋａｗａ
Ａｎｄ Ｖｅｒｙ Ｔｈａｎｋｓ Ｔｏ Ａｌｌ．

Ｐｒｅｓｅｎｔｅｄ ｂｙ Ｓｈｏｇｏ Ｈａｚａｗａ

「Ｓ・Ａ・Ｋ・Ｕ・Ｒ・Ａ ～桜～」
ご愛読頂きましてありがとうございました！

自分が初めて公に発表するＢＬ作品、如何でしたでしょうか？
もちろん、自分はノーマルですが、極稀に驚くほどの美少年に出逢うことが有るとそういう世界も、まあナシってワケじゃないかなとか思ってしまいます。
また、昨年の春頃に自分の友人の俗に言う「腐女子」に見せられたとあるＢＬアニメーションにインスパイアされ、かなり昔から構想として練っていたものを描いて見ました。
ご意見、ご感想等頂けましたら望外の喜びです。
また、本作品は「小説家になろう」スピンオフ企画「春エロス２００８」参加作品です。
本作品をお気に入り頂けましたら、リンクから投票して頂けると嬉しく思います。

それでは、またお会いできる事を楽しみに…

作者より、全ての読者様に親愛の情と感謝の念を込めて…

２００８／４／１５　羽沢　将吾

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9954d/

Ｓ・Ａ・Ｋ・Ｕ・Ｒ・Ａ　～桜～

2010年10月17日02時20分発行